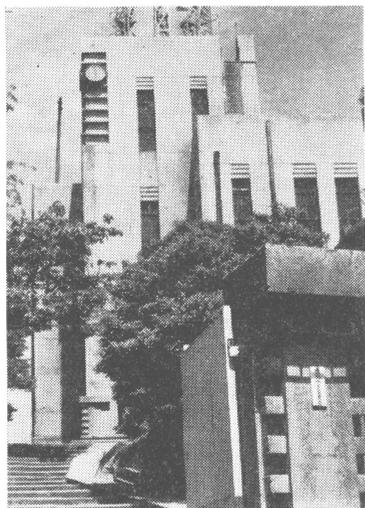


## 地方だより

### 横浜地方気象台

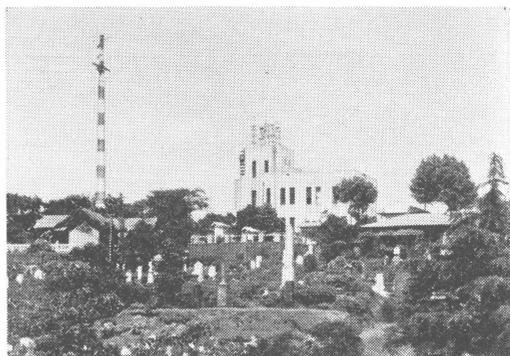


気象台庁舎正面

当気象台は東京の蔭にかくれてしまって存在がとかくうすれ勝ちであるが、横浜の港湾と主要市街地とを一望のもとに見下す眺望、環境ともに絶佳の地に厳然としてそびえている。丁度外人墓地の上になっており横浜名所の一つであろう。創立は明治29年で最初に中区海岸通り（現在の大棧橋附近）に設置され関東の大震災にはことごとく灰燼に帰してしまった。その後、現在の地に移転したのであるが幸いに先輩の卓見よろしきを得て、当時職員僅かに8名であったにもかかわらず、地下1階地上3階の対震建築となっており、現在でも庁舎にはかなりのゆとりがある。

屋上に立って北の空を望めば京浜工業地帯が延々と拡がり、その煙は日本経済のバロメーターのごとく連日空をこがしている。最近大気汚染の問題がやかましくなり煤煙からみた都市気象の究明に全力を向けている。繫留気球を揚げたりして観測を実施しているが汚染対策となるとなかなか困難な問題が含まれている。

また横浜は神戸と並び称せられる港湾を持ち、これに対する協力業務は増加の一途にある。周知の通り外航船の出入すること連日ひきもきらず気圧計の検定や気象相談などには日本人に限らず各国人の訪問も絶え間ないの



気象台庁舎遠望（手前は外人墓地）

がこの特徴である。必然的に港湾予報や波浪予報が大きくクローズアップされてくるわけで、台長を主査として組織的に実際的な研究が行われつつある。波のスペクトル法による予報の検証と実施を目標にしているのであるが将来に対する見通しは明るい。

横浜・川崎に関連してだけでもこのような難問題を内蔵しているのであるが、さらに目を南に転ずれば日本最大の漁港たる三崎があり、ここからは太平洋はおろか印度洋・大西洋にまでマグロ船が出漁している。相模湾のブリ網も有名なもので漁業気象にも無関心ではあり得ない。又西の方を眺めれば箱根温泉群をひかえ観光地気象や山岳気象にも要望課題は尽きない。

とにかく当気象台は目立たない存在ながら幾多の大問題を抱え着実に解決に努力しつつあることを報告して筆をおく。  
(磯崎一郎記)



気象台より港を望む